

本校における特別支援のあゆみ

私立学校におけるこれからの特別支援を考える

渡部 圭子 (米沢中央高等学校)

はじめに

本校は創設者椎野詮が述べた「才知より出でたる行為は軽薄なり 心情より出でたる行為は篤実なり」を建学の精神とし、生徒と教職員が一丸となり、学び合うことに飽きない、活気ある爽やかな学園づくりを目指し日々活動している。

(本校概要) 現在在籍数 615名 (男子 372名 女子 243名)

	男子	女子	計	コース・クラス数
1年	108	92	200	特進1 総合(進学3 ビジネス2)
2年	136	71	207	特進1 総合(進学3 ビジネス3)
3年	128	80	208	特進2 総合(進学2 ビジネス3)

特進コース、総合コース(進学クラス含む)計20クラス編成である。

本校の特別支援教育

特別支援教育が一つの独立した校務分掌になったのは、「特別支援コーディネーター」が正式に任命された平成20年度からである。それ以前は、担任を中心とし生徒指導課の「生徒相談」担当者と養護教諭が教務や生徒指導課と相談しながら個々に対応していた。2006年(平成18年)6月、「学校教育法等の一部を改正する法律案」が成立し翌年4月から特別支援教育が実施され、本校でも『特別の支援を必要とする生徒』に対し、学習上又は生活上の困難を克服し、自立を図るために必要な教育的支援を行うことを目標としての活動を本格的にはじめ、試行錯誤を重ね現在の形になった。

支援対象者に関しては本校独自の考え方で対応している。発達障害であると医療機関で診断され、本人または保護者から特別な配慮が必要であると申請があった生徒はもちろん、「不登校生徒の8割は発達障害によるものかもしれない」という考え方にに基づき「高校を卒業し、次のステップに進みたい」という希望を持って生きている生徒の未来を奪ってはならない」という見地から、不登校生徒に対しても支援を行っている。

しかし、本校は全日制の普通科高等学校であるため、あくまでも教室で学習することを前提に、入学後の個々の状況へ対応する形での支援となる。

目的

平成11年、教室で授業を受けることができない生徒が初めて認識されてから、今日まで試行錯誤を重ね、教務上の問題(進級・卒業に関する制度、出欠席に関する事)、生徒指導上の問題を整理し、ハード面(サポートルームの設置)を整備した。また今年度は特別支援コーディネーターに加え、専属の担当者として特別支援員も配置された。

今後も充実し、安定した支援を行うために必要な事は何か、また本当に必要な支援、私立だからこその支援とは何かを考えることである。

方 法

1. 対象者

特別支援コーディネーターが任命され、「サポートルーム認定」制度が運用されるようになった平成20年度から平成25年度の間、「サポートルーム認定」制度を利用して卒業した39名に在学時についてアンケートを行った。

*サポートルーム認定制度

進級・卒業への強い意志を持ちながら、様々な事由により通常の教室での学習が困難になった生徒が対象である。学年からの申し出により、特別支援校内委員会による検討会、校長面談を経て、双方の了承後認定される。単位の修得、出欠数に個々の事情に応じた特別な支援を受けることができる（フレックスタイム登校等・定期テストでの配慮等）。認定された生徒は校内に設けられた2か所のサポートルームを心身の状況に応じて利用し、「毎日の授業を自分の教室で受ける」ことを目標に日々学習に取り組む。

対象者である卒業生にとっては在学時を振り返ることは、悩み苦しんだ日々を思い出すことになり決して楽しいことではない、ということを考慮し、アンケートは郵送せず、本人了解のうえ、学校やその他の場所で直接会って話を聞く、インタビュー形式にした。

年度	人数（女性）	在学時の状況			現在の状況			回答数
		発達障害	不登校	その他	就職	進学	その他	
H20	2（1）	0（0）	2（1）	0（0）	1（0）	1（1）	0（0）	0（0）
H21	6（3）	3（2）	2（1）	1（0）	5（2）	0（0）	1（1）	3（2）
H22	4（2）	0（0）	4（2）	0（0）	2（1）	1（1）	1（0）	1（1）
H23	8（3）	2（0）	6（3）	0（0）	4（1）	2（2）	2（0）	4（2）
H24	8（4）	1（0）	7（4）	0（0）	5（3）	2（1）	1（0）	6（4）
H25	11（4）	2（0）	7（3）	2（1）	5（1）	3（2）	3（1）	6（3）
計	39（17）	8（2）	28（14）	3（1）	22（8）	9（7）	8（2）	20（12）

*「在学時の状況」における「その他」は、事故・摂食障害などを含む

*「現在の状況」における「その他」は、家事手伝い・病氣療養中を含む

*「就職」には、正規採用・パート・アルバイトも含む



資料1（写真）サポートルーム1の入り口。（上の写真）奥が職員室の入り口となっている。他の生徒の目を気にすることなく教員と連絡がとれ、自ら質問や相談ができるようにしている。震災、緊急時に職員がすぐに対応できる。サポートルーム内：通常教室の半分・カーペット敷き。出入口で内ズックを脱ぐ。9時から15時まで原則ここで過ごす。定期テスト、各種調査もここで受ける。登校後は各自個人の引き出しから課題を取り出し、進める。（定期テスト前はテスト勉強）1日1～2時間の授業（複式学級式）がある。それ以外は自習中心となる。体育、情報、調理自習、英会話の授業もあるが 実技科目の評価は、レポートで行う。個人連絡用引き出しと出席票・登校すると必ずこの中を

確認し、登校時間を記入する。課題やクラスで配布されたプリントも確認。提出物も担当者に渡せない時はここに。

2. アンケートの質問項目と回答・資料2

高校入学前について教えてください		
Q1 中学校への登校状態は？		
1 普通登校	5人	25%
2 別室登校	2人	10%
3 保健室登校	4人	20%
4 不登校	9人	45%
*「2・3・4」と答えた人への質問 そのような登校状態になった理由は何か？(複数回答可)		
1 教員との問題	4人	
2 友人との問題	11人	
3 健康上の問題	1人	
4 部活動の問題	1人	
5 家庭の問題	2人	
6 その他	3人	
・ 学校に対する意欲が湧かなかった	3人	
・ 学校やクラスになじめなかった	2人	
Q2 中学の時の希望進路は？		
1 高校進学	16人	80%
2 就職	2人	10%
3 未定	2人	10%
4 その他	0人	0%
Q3 米沢中央高校に進学を決めた理由は？(複数回答可)		
1 先生のすすめ	5人	
2 家族のすすめ	5人	
3 友人のすすめ	0人	
4 第一希望に合格しなかったため	4人	
5 欠席が多いため公立校が受験できなかったから	3人	
6 米沢中央高校に入りたかったから	3人	
* 学区内に他の私立高もあるが、なぜ中央高校に？		
1 登校に便利だったから	2人	
2 部活動が盛んだったから	1人	
3 米沢中央高校でやりたいことがあったから	2人	
4 米沢中央高校を強くすすめられたから	10人	
5 その他		
・ 体験入学が楽しかったから	3人	
・ 進学をしたかったから	2人	
Q4 入学前に「サポートルーム」等の支援があることを知っていたか？		
1 知っていた	2人	10%
・ 中学校の先生から話を聞いていた	2人	
2 知らなかった	18人	90%
高校入学後について教えてください		
Q1 どのような理由で「サポートルーム」認定に？(複数回答可)		
1 友人関係をめぐるトラブルから	17人	
2 学業不振(勉強がわからなくなった)から	1人	
3 学校生活の問題(不応・違和感)	4人	
4 家庭内の問題	0人	
5 身体的な問題	1人	
6 精神的な問題(意欲の低下・無気力)	6人	
7 その他・想像していた高校生活とは違ったから	1人	
Q2 サポートルーム登校になり、教室に行っていない時の気持ちは？		
1 他人の目が気になった	12人	
2 特に何も感じなかった	2人	
3 親に悪いと思った	7人	
4 兄弟姉妹(祖父母)が気になった	2人	
5 教室に行くことができず辛かった	2人	
6 教室に行かないことでほっとした	3人	
ア 身体的に		
イ 精神的に	19人	
7 将来が不安だった	6人	
8 勉強についていけない心配だった	2人	
9 学校をやめたいと思っていた	2人	

Q3 教室に行かなくなってからの家族の反応は？(複数回答可)		
1 自分の意志を尊重してくれていた	19人	
2 「行くように」と怒った	3人	
3 担任の先生や養護教諭に相談するように言った	3人	
4 病院やカウンセリングをすすめた	3人	
5 無関心だった	1人	
6 その他	0人	
Q4 サポートルームに登校することが決まった時の気持ちは？		
1 ほっとした・安心した	11人	
2 本当は行きたくなかった	9人	
3 その他・その後の進路が心配だった	8人	
Q5「サポートルーム認定」というシステムについてどう思いますか？		
1 あって良かった	17人	85%
2 なくても良かった	0人	0%
3 どちらとも言えない	3人	15%
Q6 今振り返って、当時「サポートルーム」でして欲しかったことや必要なものは何かあるか？(複数回答可)		
「学習面」	・ 授業をもっと増やしてほしかった	5人
	・ 学習用のパソコン	1人
	・ クラスの授業進度をもっと教えて	4人
	・ クラスの授業についていく工夫	3人
	・ 楽しい授業	2人
	・ 希望進路実現のための授業	2人
	・ 定期テスト対策の授業	1人
「生活面」	・ インターンシップに参加したかった	1人
	・ サポートルーム内でのレクリエーション	4人
	・ 先生との何気ない会話	2人
	・ 自分についての理解(障害・病気)	5人
	・ 1人になることができるスペース	1人
	・ サポートルーム内を関係ない人に覗かれたりしないようにしてほしい	2人
	・ 家族への説明	1人
	・ そっとしておいてほしかった	12人
	・ 病院や専門機関の紹介	0人
	・ 特にない	3人
Q7「サポートルーム認定」登校になって得たものは？(複数回答可)		
1 安心感	11人	
2 人間関係	1人	
3 思い出	1人	
4 精神的な強さ	3人	
5 心のゆとり	8人	
6 考える時間	13人	
7 学力	0人	
Q8「サポートルーム認定」登校になって得たものは？(複数回答可)		
1 安心感	0人	
2 人間関係	6人	
3 思い出	8人	
4 精神的な強さ	0人	
5 心のゆとり	1人	
6 考える時間	0人	
7 学力	15人	
Q9「サポートルーム認定」登校になってから友だちとは連絡は？		
1 とっていた	15人	
ア メールやラインで	12人	
イ 直接会って	8人	
ウ 自宅や携帯の電話で	5人	
2 とっていない	5人	
Q10 高校時代、悩みを誰に相談したか？(複数回答可)		
1 家族(父:2人・母:7人)	9人	
2 友人(小学校時代:1人・中学校:6人・高校:5人)	12人	
3 誰にも相談しない	2人	
4 その他・親を心配させたくないから・誰も信用できなかった	1人	

Q11 高校卒業後どのような進路を考えていたか？		
1 進学(4年制大学・短大・専門学校)	13人	65%
2 就職(パート・アルバイト・契約社員含む)	5人	25%
3 自宅にいる(病気療養も含む)	0人	0%
4 その他	2人	10%
Q13 進路を決める時にしてもらいたかったことは？(複数回答可)		
1 就職・進学などの情報がほしかった	3人	
2 職場体験等がしたかった	0人	
3 オープンキャンパス、職場見学がしたかった	0人	
4 特に必要なかった	12人	

取り組みの成果

今回の研究を通して、高校3年間をサポートルームで過ごした彼らが、それぞれ自分の課題を抱えつつも、社会の中で帰属意識を持ち前向きに歩もうとしている姿を確認できたことが最大の成果といえる。平成13年、「別室登校」から始まり、

現在の「サポートルーム制度」まで、様々な事情を持つ卒業生を送り出してきた。送り出すことが精一杯でその後卒業生たちがどう過ごしているか、というところまで把握できずにいた。

実際に会うことができた20名の卒業生のほとんどが進学やアルバイト先など、社会となんらかのつながりを持って生活しており、そのうち6名が親元を離れ一人暮らしをしていた。中には発達障害を抱えながらも、大学に進学し、「初めて集団で受けた授業が大学の授業で、しかも90分です。とても疲れます。」という泣けるような笑い話まで飛び出した。社会経験を経、高校時代よりも饒舌になり、当時について時間を忘れ話し込んだ卒業生もいた。何よりも「サポートルーム認定」を受けて登校する生徒の思いについてたくさんアドバイスを聞くことができた。私学の教員として今後も連絡をとりつつ必要があれば、専門機関を紹介するなどできる範囲で卒業生たちの生活をサポートしていきたいと思った。

これからの本校の特別支援教育

本校における特別に支援が必要な生徒の90%が高校卒業後、進学または就職を目指していることがわかった。このことから高校における特別支援の役割が、「高校卒業資格取得のための支援」から「社会に出ることを想定した支援」にはっきりと変わってきている。

支援が必要な生徒の75%程度が小・中学校において不登校や別室登校を経験している関係上、当初は「登校すること」に重きがおかれ「進級・卒業」そのものが目標となっていた。本校では全職員共通認識のもと、特別な支援を必要とする生徒たちが学習に取り組む場所・時間・課題は確保し、進級、卒業に関する教務上の問題も教務課、生徒課と連携し規定化した。生徒も居場所を得て安心して登校している。そして担当者が、一人一人の学習や生活状況を以前よりも把握しやすくなり、担任や学年、教科担当者と連携がスムーズにとれるようになってきた。しかし全校生徒にとって「高校で学び、希望進路達成」という目標がある中で、サポートルーム認定を受けた生徒が、安心感を得ても「学力」に対する不安が大きく、通常登校の生徒に比べ卒業後「社会で生きていく知識や常識」が不足していることや、基本的な生活習慣のリズムの乱れや体力の低下に対する不安があることを訴える卒業生が多くいたことに注目していかなければならない。

今後、特別な支援を必要とする生徒が減少するとは考えにくい。そのような子ども一人ひとりが自分に合った目標をもち進路を達成していくためには全職員が協力し、日ごろからの行動観察、教員同士の情報交換そしてその上で生徒一人ひとりをどう捉え(所見)、具体的に何をし(方法)、どうなったか(結果)ということ把握し、日頃から病院やカウンセリングなどの専門機関、発達障害の若者の自立を支援しているNPO法人、インターンシップ、トライアル雇用などに協力していただける民間企業など、さまざまな分野と連携が組めるように早急に活動の幅を広げていく必要性を強く感じた。